花信

hanadayori

秋山庄太郎写真芸術館ニュースレター
「花信—はなだより」創刊号
2007年6月　禁無断転載　**Vol.1**

contents

1面：　開館のごあいさつ
2〜3面：秋山庄太郎写真芸術館
展示室・施設のご案内
4面：　開館まで、そしてこれから
NEWS
刊行案内
学芸員室から

開館のごあいさつ

秋山庄太郎写真芸術館館長
文学博士
段木一行

写真で内面の「心」を写し出す先駆者

秋山庄太郎写真芸術館の開館に鑑み、ご挨拶申し上げます。

日本に写真が入ってきたのは幕末であります。当初写真機は在るがままの姿を写し取る機械として珍しがられました。そして、実に貴重な歴史的・文化的資料として学術世界にその価値はますます増してきております。

日本での写真の歴史はまだ浅いものでありますが、近代に入ると日本人はこれを使いこなすようになりました。写真は新聞・雑誌に華やかな彩りを添えるばかりではなく、その主役に躍り出るようになりました。

たしかに文字情報を越えて説得力を持つようになりましたが、皮相に流れて正しく情報を伝えていないのではないかという批判もありました。姿かたちだけの写し取りに終わり、内面の真実を伝えていない場合もある、ということであります。特に、日本が数度にわたって経験した戦争でこの指摘は顕著になったのであります。

戦後になって、それまでの実績を踏まえ、自由な発想のもとに、内面的な「心」を写し出そうとの研究が具体化してまいりました。秋山庄太郎はその先駆的な人物であります。彼は被写体の深層部にカメラの焦点を絞り込み、内に秘める崇高な「真実」と「美」を追い求め続けたのであります。

彼は少年の頃から芸術や文学に深い関心をもち、豊かな感性を育くみました。天職となった写真界に身を置いてからは、主として人物と花に対象を絞り込みました。人間の内面に迫り、その深層部に息づく崇高なる精神を追い求めました。また、花に潜む限りない「美」をみごとに抽出しております。

これは技術を越えた研ぎ澄まされた感性によるものであり、「芸術」の域にまで到達し、見る者に限りない心の豊かさを提供しています。

「写真芸術」に寄与するミュージアムへ

故・秋山庄太郎は膨大な作品をわれわれに残してくれました。コンピュータ機器も駆使しながらの整理作業は現在も継続しています。今回、ここにその一端を公開する運びになりました。

この写真芸術館はかつて秋山がアトリエとして使用していた建物でありますが、ただ故人を偲ぶ記念館ではなく、写真人口の爆発的な増大に対応し、写真芸術の発展に寄与することを念頭に入れたミュージアムとしての役割を果たしたいと考えております。

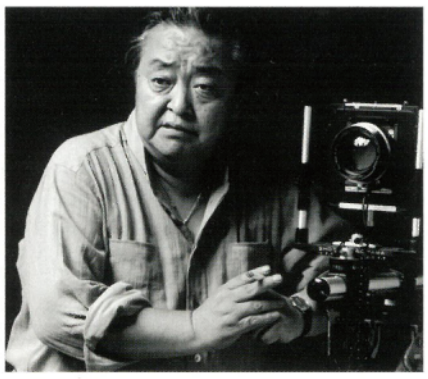
限られたスペースなので、故人の全体像を一度にお見せできないのが残念でありますが、どうぞ、心ゆくまでご鑑賞くださいますようお願い申し上げます。

都会の「オアシス」としての役割も

小さなミュージアムではありますが、お立ち寄りくださる方々の語らいの場として多目的室を兼ねた展示室も配置し、都会の喧騒の中のオアシスを実現する試みも行なってみました。お気軽にご利用いただけましたら嬉しい限りです。

開館にあたっては充分な準備と配慮を重ねたつもりではありますが、まだまだ至らない点があるやもしれません。皆様方のご批判ご叱正を賜り、もって館員一同の励みとし、館運営の充実に生かしたく存じております。

多くの方々のご来館を心よりお持ち申し上げます。



秋山庄太郎

＜略歴＞

1920年　6月8日、東京・神田に生まれる
1933年　中学入学後、小型カメラを買ってもらい、以後、写真に夢中になる
1943年　早稲田大学商学部卒業。写真集『翳』を自費出版。中国大陸に出征。
1946年　東京・銀座に秋山写真工房を開設
1947年　近代映画社写真部に入社
1950年　日本写真家協会創立会員となる
1951年　フリーランスとして独立し活躍
1953年　二科会写真部創立会員となる
1955年　東京・麻布今井町にスタジオ開設
1956年　写真家集団「ギネ・グルッペ」結成
1958年　日本広告写真家協会創立会員となる
1960年　パリへ4ヶ月間の外遊を行なう
1964年　東京・西麻布にスタジオを移転
1965年　この頃から本格的に花を撮り始める
1971年　日本広告写真家協会会長に就任
1974年　講談社出版文化賞受賞
1980年　「花の会」結成。日本写真芸術専門学校校長に就任
1986年　紫綬褒章受章
1990年　日本写真家協会名誉会員となる
1993年　勲四等旭日小綬章受章
1994年　全日本写真連盟副会長に就任
1997年　日本写真協会副会長に就任
1999年　町田市フォトサロン「秋山庄太郎美術館」が開館
2003年　1月16日、東京・銀座の写真賞審査会場で倒れ、急逝。享年82歳。

「太陽の花びら」（1979年）

秋山庄太郎写真芸術館 展示室・施設のご案内

女優や花や自然など美しいものを、心のままに愛し、数え切れないほどの写真に残した故・秋山庄太郎。当写真芸術館は、その遺志をついでこの6月にオープン。もともとは故人のアトリエであったこの空間が、ミュージアムとして生まれ変わり、写真とその美を愛する多くの人々をお迎えすることによって、また新たないのちを吹き込まれたのです。ここでは、当館の設計を担当された建築家の並木秀浩さんとサイン計画を担当されたデザイナーの小林健三さんに、設計やデザインのコンセプトについてお聞きしました。(聞き手・板見浩史)

アプローチ全景
正門からアプローチへの眺め。右側の白い壁には、生前よく秋山氏が作品に使っていた「庄」の自作落款と自筆サインがくっきりと描かれ、根津美術館方面から来るととても目立ちます。エントランスの手前にはコンクリートのフレームが設置されアクセントに。背景の視覚空間をすっきりと整理し、ギャラリーへの導入をうながす心理効果を狙ったものです。

風除室
外と館内とを区分する風除室にも山荘亭の梁が生かされています。もともと山形の開拓村の家屋に使用されていた木材は、近代的な空間と組み合わされることで、初めて来た場所なのに懐かしさを感じさせてくれます。また、床の左側には山荘亭玄関の踏み石が花置き台として蘇りました。館内いたるところに故人の想い出につながる素材が散りばめられています。

心和む雰囲気の中で秋山作品を鑑賞できるよう 来館者が主役になれる空間づくりをめざしました

●建築家・並木秀浩さんへのインタビュー

—並木秀浩さんは、住宅のリフォームをテーマにした人気テレビ番組「ビフォーアフター」をはじめとして、建築に関するさまざまなＴＶや雑誌でも活躍中の一級建築士。「長く親しまれ使い続けられる建物を造ること」をみずからのポリシーに掲げる、いま脂の乗り切った建築家です。

そんな並木さんに秋山庄太郎写真芸術館の設計・監理が依頼されたのは、冒頭にあげた並木さんのお仕事ぶりを知った秋山家からの期待があってのことでした。

並木　子供の頃からよくＴＶなどで拝見していた秋山先生が2003年に亡くなられて、その記念美術館を造りたいという話をいただき、ご遺族の上野さんご夫妻とお会いしました。そのときにお聞きした秋山先生のお人柄の話がとても印象的だったんです。日本を代表する写真芸術のスタイルを作られた方であるとともに、人に優しく各界の方々と幅広い交流を持たれ、何よりも写真芸術の大衆化に大きく貢献された方だった、ということ。

そのとき、そんな秋山先生の写真芸術の拠点ともいえるこの館の設計を任せていただける以上、先生のお人柄を感じていただける、親しみのある建物を造らせていただこう、と心に決めたことを、いまでも覚えています。

秋山氏にちなんだ思い出の建材を随所に使いました

—そういったことを踏まえ、外観および内部の設計に関して留意されたことなどをお聞かせください。

並木　上野さんご夫妻と話し合いながら創っていったことですが、この場所を訪れた人が、ホッとするような親しみを感じ、秋山先生の作品や人となりに触れながら、自分自身が主役になれる場にしようという基本的なコンセプトです。それは自然(花、木、風、空)をテーマにしたデザインの展開です。たとえば、アプローチ付近にもともとあった樹を生かし、植栽と先生の美しい「花」の作品が、自然の中で調和して味わえるような空間を計画いたしました。

—ほかに、ここは特別にこだわった、この館ならではの見せどころといったものがあれば教えてください。

並木　まず、アプローチ空間では、エントランスを美しく感じていただけるよう、途中にコンクリートのフレームを造りました。写真でいうファインダーですね。このフレームによって切り取られた建物の風景を際立たせ、さらに進んで奥の建物に入ってみたいという雰囲気を引き出すような効果を狙っています。

—秋山先生の麻布のスタジオや米沢のアトリエ「山荘亭」で使われていた建材も、ここでは随所に生かされているとか。

並木　そうですね。故人の使用していた素材を思い出として生かすために何ヶ所かに活用しています。内部空間では、まず外と館内を区切る風除室の内側に山荘亭に使われていた柱と梁を利用しています。もともとは、山形の開拓村に使われていたものなので、この南青山で3度目に生まれ変わった、ということになりますね。おなじく山荘亭の玄関の踏み石だった大きなフラットな石を「花台」として置きました。

また、エントランスや館内のベンチなども秋山先生にゆかりのある素材を使っているんです。ぜひ、それらに触れてみて秋山先生を偲びながら和んでいただけたらと思います。

作品を「見ていただく」という気持ちがこの館のメインコンセプト

—入り口を入るとまず、緩やかなカーブを描く分厚い木のカウンターが迎えてくれますね。

並木　これは非常に大きな天然のシデの木を一枚板にしたものです。柔らか味がありながらボリューム感を持った自然な木の曲線が、来館者を迎えてくれます。自然を愛された秋山先生の遺志を表わそうということで造ったものです。

—続いて展示室をご紹介ください。

並木　この美術館では作品を「見ていただく」という考え方を基本に、お客様が本当にくつろいで作品を鑑賞していただけるよう、設計にも心配りをしました。第１展示室は、もともとあったアーチを生かしたパティオ(中庭)のような空間です。第２展示室は、木立の間から光がさすイメージで曲線を取り入れたデザインにしています。

自然のなかにある心地よい揺らぎを感じながら、リラックスして写真を見ていただければ嬉しいですね。また、この二つの展示室をつなぐ階段の踊り場からは中庭を見ることができます。この空間でまた、ホッとした気持ちになっていただけたら、と思います。

—最上階の第3展示室は多目的室にもなっているんですね。ここはどんなコンセプトで設計されたのでしょう。

並木　ここは、くつろぎのカフェから、あるときは展示室にも利用できるような可変空間になっています。可動式の間仕切りや壁により、一瞬にして変身する空間に仕立てました。お客様が写真集などを見ながらお茶を飲んだりできるようなスペースも想定していますが、レクチャールームやちょっとしたイベントなどさまざまな用途にも対応できるように工夫しました。外光もふんだんに採り入れることもできますので、その微妙な調節によってさまざまに表情を変える空間に変化するわけです。

将来は屋上も緑化して来館者に開放したいですね

—限られた空間が実に見事に活用されているという印象を受けますね。このほか、建物全体のことでは、どんな工夫が？

並木　やはり自然をテーマのひとつにしていますので、省エネルギーの観点からもいろいろな配慮をしています。年間を通して安定した環境(温度や湿度)が作れるように高断熱化を図るとともに、建物のコンクリートの構造体全体に熱を溜める空調計画をしているんです。わかりやすくいうと、石焼ビビンバの器のようなもの(笑)。

コンクリートや床に蓄えた熱で空調を行なっているので、温度が安定し、効率もとてもいいんですね。また、照明にも人感センサーを付けていますので、人のいない空間は自動的に消灯するようになっています。

—なるほど。将来的にはこの館の屋上も

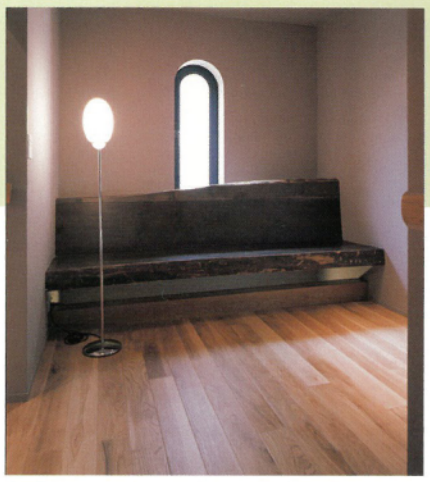
入り口カウンター
風除室を抜け館内に入ると、大きな一枚板のカウンターテーブルが出迎えてくれます。シデの木に吹き漆という処理をした材を使用しており、大木の自然で緩やかなカーブがぬくもりを感じさせます。カウンターの下は、来館者の荷物を預かる収納スペースにもなります。

第1展示室への階段
地下の第1展示室へ向かう階段の先の壁では、大型カメラのリンホフを構えたにこやかな表情で秋山庄太郎の肖像写真が出迎えてくれます。60歳くらいのときに撮影されたものらしく、写真家として肉体的にも内面的にも充実していたことをうかがわせます。ここへ来れば、いつでも元気な「秋山庄太郎」に逢えるでしょう。

第1展示室
第1展示室の独特のアーチはもともとの建物の構造を生かしたもの。ギャラリー内の壁の色も秋山庄太郎が選んだ薄いあずき色で統一され、床や手すりといった木の部分も秋山が選んだナラ材を使用。来館者がゆっくりとくつろいだ気持ちで写真作品と向き合えるよう、落ち着いた雰囲気が演出されています。右奥に見えるのは第2展示室へと続く階段。

第2展示室
天井には木立から覗く空をイメージしたという不定形なデザインの間接照明が。揺らぎの空間とでもいうのか、不思議に心が癒されてくるような気がします。正面にはキャプションボードが設置され、ここには秋山庄太郎の年譜と幼年期からの思い出の写真や作品などが随時入れ替えて展示される予定です。

第3展示室（多目的室）
他の展示室と違って、カフェやレファレンスコーナーのあるこのギャラリーは、ふんだんに陽を差し込ませることもできるスペースです。左側の採光部分にある可動式の壁面ボードを展開することによって全体を展示スペースに変えることもでき、写真愛好家による作品展やセミナールームなど、さまざまな用途にも使えるよう工夫されています。上野正人学芸部長によると、自然な採光を生かした体験撮影や、ミニコンサートなど、従来のギャラリーという枠にとらわれないで、多くの人がいろんな目的で活用できるスペースにしていきたい、とのこと。



山荘亭のカウンターテーブルに使われていた木材をアレンジして甦ったベンチ。第2展示室の出口に設置されています。使い込まれた木の材質がこちよい温もりを与えてくれます。秋山庄太郎もそんな感触を味わっていたに違いありません。

第1展示室から第2展示室への階段
階段途中の踊り場からは植栽された中庭が見渡せます。小さいスペースながらも、ほっと心の安らぐ空間です。

エントランスのベンチ
建物入り口に置かれた木製のベンチ。秋山庄太郎がこよなく愛した米沢市のアトリエ山荘亭の梁が再利用されたもの。アプローチ部分の壁面には群馬県産の多胡石が使われていて、軟らかい砂岩質の手触りと木目のような色と風合いが落ち着いた雰囲気を出しています。

秋山庄太郎写真芸術館・利用案内

■開館時間＝午前10時～午後7時
(入館の受付は午後6時30分まで)
■休館日＝定期休館日・毎週火曜日
(火曜日が祝日の場合は開館します)
年末年始＝12月26日～1月3日
夏季＝8月第3火曜日～9月第2火曜日
※展示替え・館内整備のための休館＝1週間～10日程度
■料金＝一般　700円
学生(高校生以上)　500円
小・中学生　300円
高齢者(65歳以上)　500円

秋山庄太郎写真芸術館・建物概要

■構造・規模＝鉄筋コンクリート造り、一部鉄骨造り　地下1階・地上2階建て
■敷地面積＝179.65m²
■建築面積＝97.81m²
■延床面積＝238.66m²
・地下床面積＝72.41m²(展示室・収蔵庫)
・1階床面積＝90.57m²(風除室・エントランス・展示室・収蔵庫)
・2階床面積＝75.68m²(展示室・事務室・厨房・化粧室)
■設計・監理＝並木秀浩＋(株)ア・シード建築設計
■施工・建築＝北野建設(株)
■サイン計画＝小林健三＋(有)ニコリデザイン
■工期＝2006年10月15日～2007年4月30日

活用されることになるそうですね。

並木　はい。周囲にはマンションなどの住居も多いので、目隠しも兼ねて緑化を進めています。植物の成長を待って、来館者の方々が緑に親しんでいただけるようなオープンスペースにしていきたいと考えています。屋上も、花や植物を愛された秋山先生の写真芸術館にふさわしい、くつろぎの空間として親しんでいただきたいですね。

Profile
並木秀浩(なみき・ひでひろ)
1960年生まれ。1993年、ア・シード建築設計設立。東京都墨田区主催優良景観表彰「まちなみ建築賞」、ＩＮＡＸ主催デザインコンテストなど、入賞多数。テレビ番組「ビフォーアフター」「辰巳琢郎の夢リフォーム」「住まいの極意」「渡辺篤史の建物探訪」などで手がけた作品が紹介。

●デザイナー・小林健三さんへのインタビュー

秋山氏の美に対する優しさと厳しさ、その両方をサインやロゴに生かしました。

道に面した館の壁には自筆のサインやシンボルマークがレイアウトされていて、ひときわ目を引きます。そのほか、館内各所の誘導マークなどをデザインされたのが、小林健三さん。「思わずニコリとするデザイン」をポリシーとするニコリデザインの社長でもあります。当館のミュージアムグッズのデザインなども手がけられる予定とか。

わかりやすく、かつ美しいシンボルマーク

—生前からよく秋山先生をご存知だったそうですね。

小林　ええ。私自身が秋山先生の花の写真が大好きだったので、依頼を受けたときにはたいへん嬉しく思いました。生前、スタジオへ仕事の打ち合わせにお邪魔したとき、たまたまお孫さんが遊びに来て、仕事中は厳しい表情の秋山先生がニコニコしながら助手さんに「おい、カメラ」といって、お孫さんのスナップを撮り始められたのをいまでも覚えています。もちろん打ち合わせは、そのぶん伸びてしまいましたけどね(笑)。

—館内・外のサイン関係のデザインで留意されたことは？

小林　美に対する優しさと厳しさの、両面を持っておられた方でしたから、それがにじみ出るようなデザインをできればいいなと思いました。また、日頃から「美しさ」ということを多くの人に伝えたいと思っておられた写真家なので、サインやロゴも多くの方にわかりやすく親しみがあり、かつ美しいものにしようと心がけました。館名のロゴは先生直筆の書で構成し、館のシンボルマークも先生手づくりの落款をそのまま使用しています。誘導系のサインは、あまり広くない空間なので、でしゃばらず通常よりもやや下にして視線をさえぎらないよう、それでいてきちんと機能を果たすよう計画しました。この美術館全体が、「美しさ」のメッセンジャーになるようになればいいですね。

Profile
小林健三(こばやし・けんぞう)
1953年生まれ。中央美術学園卒業後、広告製作会社のアートディレクターを経て、ニコリデザイン設立。現在、中央美術学園デザインイラストコース主任講師、同学園理事。1999年日本デジタルアートコンテスト松永真賞など、受賞多数。

アトリエ「山粧亭」（山形県米沢市）の庭園に立つ秋山庄太郎。

開館まで、そしてこれから

秋山庄太郎写真芸術館
学芸部長（学芸員）
上野正人

写真家秋山庄太郎の本丸ともいえる拠点は西麻布の「秋山スタジオ」でしたが、そのほか、南青山に「アトリエ」と呼ぶ建物を有していました。このアトリエにはギャラリーがあり（現・秋山庄太郎写真芸術館・第1展示室）、長年にわたってコレクションしていた絵画などが飾られていましたが、生前、一般に公開されることはありませんでした。

秋山はこのアトリエを建設する際、いずれはミュージアムにしようと考えていましたが、その意思を固めて私ども家族に相談したのは、2003年1月16日に急逝するひと月前のことです。私は秋山と2003年1月中旬に、この美術館設立計画の2回目の打ち合わせをすることになっていましたが、その機会は永遠に失われてしまいました。

12月の最初の打ち合わせの折には、「写真だけでなく、コレクションしてきた絵画などの芸術作品も展示する」、「今まで生きてきたなかで、いちばん思い出にのこっているパリで撮影した写真も展示する」等々といった、いくつかの方針を秋山から聞きました。但し、「ギャラリーがあるとはいえ、建物がこのままでは美術館として運営できないので、改装は考えたい」、との意向を示していました。

それと同時に、生前に幾度も指示されてきたことですが、「没後は、すぐに西麻布のスタジオを取り壊すこと」を念押しされました。

秋山の諸作品や遺品の整理は今もなお続いていますが、西麻布のスタジオには厖大な量のフィルムや数々の関連資料があり、没後、これらをともかくも散逸させないように他の場所に移すのに、2年の歳月を要しました。

2005年春、秋山スタジオ解体を前にして、建築家や建設業者の協力を得て、本人の遺志であった「南青山の美術館」に何が活かせるかを検討し、資材の取り外しを行いました。また、同年秋、山形県米沢市のアトリエ「山粧亭」も老朽化に伴なって解体することになり、ここでも再利用のために、梁や柱などの取り外しを行いました。

設計図面がほぼ出来上がったのは、2006年夏、秋には建設業者が決って本格的な工事に着手。その一方で、美術館運営の要となる館長職を、長年にわたって数々の博物館設立に携わってこられた博物館学者の段木一行博士が引き受けてくださり、若手の学芸員も段木博士のご紹介で着任しました。また、秋山の写友（写真愛好家）・芸術家・出版関係者をはじめとした有識者有志の皆様からなる設立協力会（代表世話人＝西銀座デパート社長・柳澤政一氏）も立ち上がり、さまざまなご協力をしてくださることになりました。

本館の名称は当初、「秋山庄太郎記念館」を予定していましたが、段木博士の提案を基に、設立協力会の会合で「秋山庄太郎写真芸術館」とすることが満場一致で採択されました。

当館の設立経緯については、前述のように、秋山庄太郎当人の意思に端を発しています。秋山が今も健在ならば、「記念館」という名称は用いなかったでしょうし、そのような意味も含めて、「写真芸術館」という名称は的を射たものであると思います。

物故者の功績を称えたり、ゆかりの歴史的（個人史的）資料を中心に展示する、いわゆる「個人(故人）記念館」は全国に数多くあります。本館もまたその要素を包含するものではありますが、それだけに執着するものであってはならない、と考えています。

「歴史とは過去と現在との対話である」。イギリスの外交官であり、国際政治学者でもあったE.H.カーはそのように述べています。本館を通して、皆様が秋山庄太郎を懐かしんでくださることは、遺族にとってはとてもありがたいことです。ただ、秋山庄太郎という存在や作品をこれまでご存知なかった方にとっては、それはできませんし、思い出を共有していただくこともできません。

「憩える人々」（開館記念展示「パリの4ヶ月」より）

そのような考えから、私たちは常に「秋山庄太郎の現在的意味」も視点として、館運営に反映していくことができればと考えています。そのことが、写真芸術の振興にささやかながら寄与するとともに、皆様のかけがえのない人生をよりゆたかにするための一助にしていただくことに通じたら、これ以上の喜びはありません。

秋山庄太郎が撮りおろしの「新作」を発表することはもうありません。しかし、未発表の作品や、いずれは皆様に見ていただこうと考えていたと思われる作品は、かなりの数にのぼります。私たちは、秋山の歩みを丹念に追いながら、「今」という時を見つめ、ひとりの写真家がこだわり続けた美の世界を皆様にご紹介してまいりたいと考えています。

News 秋山庄太郎の業績を記念して 米沢市が写真文化賞を創設

生前、山形県米沢の自然と人をこよなく愛した秋山庄太郎。「山粧亭」と名付けたアトリエに大勢の写真愛好家が集い、写真談議に花を咲かせたり芋煮会を楽しんだことは有名なエピソードとして知られています。主を失った山粧亭の跡地はその後、遺族から米沢市へ寄贈されましたが、これを契機に秋山の業績をたたえ、写真芸術の振興と奨励に寄与することを目的に『秋山庄太郎記念 米沢市写真文化賞』が創設されることになりました。

国内に在住のすべての写真愛好家を対象とするもので、幅広いジャンルで活躍した写真家にちなんで、応募テーマは「花」「自然・生き物」「人物・スナップ」の3ジャンル。各部門のトップの中から文化賞を決定し、賞状・賞牌ならびに副賞として30万円が贈られます。選考は審査委員長の資生堂名誉会長の福原義春氏をはじめとして社団法人日本写真家協会会長の田沼武能氏ら5名の審査員が担当します。主催は米沢市、米沢市教育委員会。

応募期間は6月1日～8月31日。表彰式は11月10日に米沢市「伝国の杜」で開かれ、受賞作品は18日まで同館内で展示、その後、秋山庄太郎写真芸術館でも展示の予定です。

●問合せ先＝米沢市教育委員会教育管理部文化課内「秋山庄太郎記念 米沢市写真文化賞」事務局(0238-22-5111内線7501)
〒992-0012山形県米沢市金池3-1-55
http://www.city.yonezawa.yamagata.jp/

学芸員室から

「かしん【花信】―花の咲いたことや、見頃を知らせるたより。花だより。」(『日本国語大辞典』第2版)。

秋山庄太郎のライフワーク「花」の作品群の一つに、全点ポストカードからなる作品展「花信(はなだより)」があります。当ニュースレターの題字は、その作品展の自筆の題字からとりました。「花の見頃を知らせるたより」の語意に倣って、毎号、当館の見頃・見どころをお知らせしていきたいと思います。

ついでながら、当館のシンボルマーク「庄」は、「秋山」「秋粧」等々、数多くの落款からスタッフたちがこれを選びました。理由の一つは「秋山先生の顔みたいでかわいいから」。皆さんは、どう思われますか？（学芸員・斎藤智志）

冬の薔薇
写真家秋山庄太郎とその時代

刊行案内 BOOKs

山田一廣・著

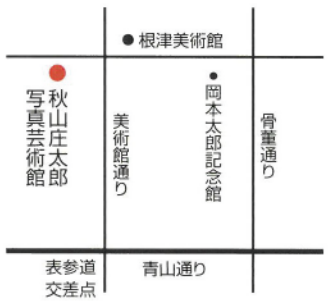
2006年9月20日発行 神奈川新聞社刊
定価：1,500円＋税

本の帯に「巨匠・秋山庄太郎、82年の足跡」とあるように、この稀代の写真家の出生から逝去までを余すところなく辿った、初の伝記といえる一冊が昨年の9月に上梓されました。著者の山田一廣氏は「飢餓高原―エチオピア飢えの構造」(講談社)などで知られ、綿密な取材力で定評のあるノンフィクション作家。多くの参考資料や時代背景との綿密な検証によって、秋山庄太郎の写真家としての波乱万丈の人生が鮮やかに甦ってきます。

写真とカメラに慣れ親しんだ多感な少年時代、出征前に有り金をはたいて自費出版した処女写真集「翳」を携えて中国大陸を転戦したエピソード、写真家としての人生を決定づけた女優原節子との出会い、売れっ子写真家としての安定を捨て「写真家四十五歳定年説」を唱えてパリへと飛んだ遊学時代、花というライフワークに出会い全国の多くの写真愛好家たちと深く豊かな交流を築いた晩年…。

ここには写真界の巨匠としてだけではなく、さまざまな挫折を経ながらも写真を天性の仕事と享受して逞しく希望を持って生きた「人間秋山庄太郎」が、等身大に描写・記録されています。本人を知る人もそうでない人も、世代を超えた多くの人々が、本書を通して、その魅力あふれる生き方に共感し、温かな人柄に思いを馳せることができるに違いありません。秋山写真芸術の核心に少しでも触れたいと思っている方にはふさわしい一書といえるでしょう。

こころの休み時間。



秋山庄太郎 写真芸術館 Shotaro Akiyama Photo Art Museum
107-0062東京都港区南青山 4-18-9
tel: 03-3405-8578 fax: 03-3403-8865

「花信―はなだより」創刊号
2007年6月24日発行
題字●秋山庄太郎
発行●秋山庄太郎写真芸術館
発行人●上野紀子
編集人●板見浩史
アートディレクター●小林健三
レイアウト●有限会社ニコリデザイン
編集●有限会社ジョフィー・コミュニケーションズ
印刷所●有限会社グッド・スタッフ

http://akiyama-shotaro.com